

□隨想□

神戸・今昔

小山祐士
え・津高和一



私の書いた戯曲で戦後神戸で公演されたのは、「蟹の町」「日本の幽霊」（二作とも俳優座）「日本

本の孤島」（文学座）と民芸上演の「泰山木の木の下で」と、先月の「瀬戸内海の子供ら」ぐらいであるが、私が初めて小山祐士の本名で発表した「十二月」という戯曲が、友田恭助、田村秋子が主宰していた築地座によって岸田国士の演出で関西学院の講堂で上演されたことがある。昭和八年の六月である。「十二月」は、「瀬戸内海の子供ら」の前年の年に書いた作品で、「十二月」の公演が築地座としては最初の、第一回の地方公演（大阪の朝日会館でも公演）であった。東京公演の時は、久保田・里見弾共同演出による久保田万太郎作の「短夜」と一緒に上演されたが、関西公演の時は「短夜」に代って、作者演出による里見弾の「小暴君」と一緒に上演された。その公演はかなり好評を博し、その公演がきっかけとなつて、築地座は大阪文楽座と提携公演を行なうことにな

り、神戸にいた中川龍一氏らによつて、築地後援会が大阪に出来たりした。

拙作には、「神戸」という名前がよく出て来るが、「十二月」という作品には、神戸の話がだいぶ出て来る。神戸の大きな造船所に勤めていた東大出の技術屋が、昭和五、六年に吹きまくった経済恐慌の渦に巻きこまれて、会社を首になり、家財や子供たちを神戸の、中山手の家に残したまま、夫婦で職さがしに上京して本郷で下宿屋を経営する話だからである。

昭和十五年に中央公論社から創刊された「新風」という文学雑誌に、私は、「言葉について」という題で、九頁ほどのエッセイを書いたことがあるが、そのなかでは、神戸言葉と瀬戸内海の或る地方の言葉を引用しながら「台詞」というものについて書いた。

「従姉妹たち」という女ばかりの戯曲の中でも主役の二人は神戸言葉をつかう。

神戸言葉や昔の神戸の町が、私のなかに非常に印象深く残っているのは、物心がつく頃から、父や母たちについて、毎年二、三度は必ず神戸に行っていたし、中学校に入つてからは、春休みと夏の休暇の幾日かは神戸で過していたからである。といふのは、いまはもう両方の店も潰れてしまつたが、私の母のすぐ下の妹が元町三丁目の呉服屋に嫁に行つていたし、伯父が三宮で貿易商をやつていたからである。

私は、毎日元町三丁目と三宮の間を行き来して、従兄弟たちとメリケン波止場に外国船を見に行つたり、買い出しに行く伯母たちについて南豆町に行つたり、時には伯父たちに支那料理を喰べに連れて行つて貰つたりした。

元町の伯父の家では、雨が降つていなかぎり毎日、早朝に諏訪山に登る習慣があつたので、私も毎朝諏訪山に登つて展望台で海を眺めた。展望台に登る途中にある小さな祠の神前に或る日、三尺位の豚の丸焼きが供えてあるのを見たことがある。伯父によると、支那人が願をかける時には、豚の丸焼きを一匹そつくりお供えするらしい。時々、豚の丸焼きが供えてある。という話であった。百グラムの豚肉の値あがりを気にしている今の人々の頃には、朝の諏訪山に登ることよりも、元町の喫茶店でおいしいコーヒーを飲んだり、上級生になるにつれて、三宮あたりの、外国美人のいた小さなバーのほうが楽しくなつていた。

瀬戸内海方面に取材旅行を行つた帰りに下車したり、劇団について行つたり、最近でも、年に一二度は神戸に行くが、諏訪山や再度山は、もう汽車の窓から懐しく眺めるだけの感じで、昨今は、もっぱら、三宮界隈のごたごたした夜の裏町を醉歩している。おでんやのハシゴである。そのハシゴの初まりか、途中に、元町の蛸の壺に寄ることにしている。蛸の壺で飲んでいると、神戸に来てゐるという実感が湧いて來るので、自分でも奇妙なことだと思つている。神戸は私には思い出の町々のなかには、六七箇所の山茶屋が散在していて、町の人たちの間には、保健とか散歩の目的で、真

冬でも夜明け前から毎朝そうした裏山に登つて、登山者の俱楽部のようになつてゐる山茶屋で休んで帰る習慣があつたらしい。夜明けと同時に起きて諏訪山に登つて朝もやで煙つた港を見るのが、子供の頃の私には、神戸に行く楽しみのひとつであつた。その頃の元町には、着飾つたいろんな外国人が歩いていた。そんな外国人を見るのも楽しみのひとつであつた。そして南京町の支那料理屋に連れて行つて貰うことと、中学生になつてからは宝塚に行くことが。

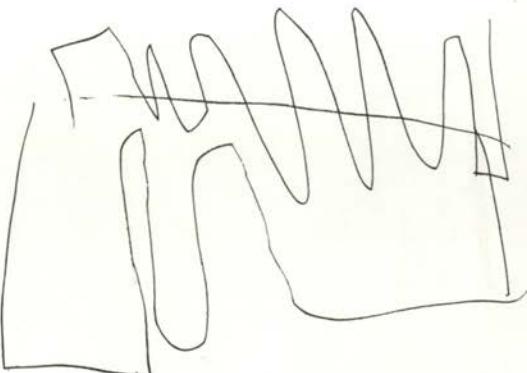
第二の ふるさと

田中千代
え・津高和一

神戸は私の第二のふるさとでもいいましようか、仕事の誕生地です。そして私の仕事を今まで育ててくれた温かいゆりかごでもあつたわけで、神戸という言葉を聞いただけで、自分の仕事の赤ちゃん時代、幼稚園、小学校と、その年輪が頭の中に浮かんでくる程なつかしく思われます。生まれたのは東京、大人になったのも東京ですが、仕事が生れて、仕事が大人になつたのは神戸です。私はこの二つのふるさとをもつことが出来て、今本当に幸だと思っています。東京、神戸、両方の街に足を一本ずつふみつけ立つてゐるような気持ちです。また、私には神戸は別の意味でなつかしい数々の思い出をよびかけてくれる港であります。外交官だった父母亲をもつた私は、両親が海外に転任しました帰国する度に、この神戸の

港に行つたのです。当時はホテルもなく、西村旅館という宿屋が元町にありました。亡くなられた西村雅貴氏がしていられた宿ですが、祖母にともなわれたりして、よく私はそこにとまつたものでした。その窓から見下す神戸港、そして海外から船が港に入つてくるのを、それに両親が乗つていると考へて、どんなにまちわびて港を眺めたでしょうか。今思い出すと『マダム・バタフライ』がある晴れた日に窓から船の入港するのを待ちわびている光景が思い出される程です。

何時も新しく祖母が作ってくれた友禅のきもの等着て、久し振りの両親の面会を胸おどさせてまつていたのも、神戸でした。外国で生れた弟や、またある時は海外で生れた初めて会う妹が帰ってきたりしました。日本を知らないこうした弟妹



カ

は、また新しいお伽の国に着くような気持ちで船をおりたものでした。何んでも珍しく、靴をはいたまま西村旅館にかけ上がり、あたりを見まわして、ソファーと思つたのか、床の間にチョコンと腰をかけてしまったことは、迎えに来た人達を笑わせたものでした。

そんな弟も、今は国連大使となつて働いている姿を思い出すと、五十年の年月はこんなにも世界を変化させ、また、私達も年をとつたものだと、考えざるを得ません。西村雅貴氏が、戦後クラブを建てられ、そこに講演に行つたり、ききに行つたり、郷土を愛する人達の集まりの場になつた頃、私もよく出入りして、なつかしい皆様達に会つたものです。そして遂には私自身が神戸港から出発したり、帰つたりする身になつてしましました。六畳の食堂のテーブルで六人の友達と洋裁のグループを始めたのが、そもそも私の学校の卵でした。その六人が今では東京の学校も合せて五千人を越える程に成長をしました。この陰には、神戸の皆様の温かい愛情と、ご協力があつたればこそと、いま、この原稿を書きながら、神戸の街そして神戸の皆様にお礼をお送りする気持でいっぱいです。元町に出来たカネボウの店で、初めて店の仕事をしたり、雪が六甲の山に積ると、朝五時には早や友達から電話で起こされ、六甲には雪が何種位ありますから早速出かけようといったさそいがかかるべきものです。

何時も準備のととのつている私は、早速スキーバーをはいて、六甲までかけつけ、ロープウェーで上まで上り、今の表ドライブウェーを、ロープウェ

ーの出発点迄滑りながら、それを二、三回すると、雪もとけてしまうといった、雪のとけぬ間のしばしのスキーのスリルを味わつたのも、あの六甲です。こうして、カネボウのおつとめに、またグリーブの洋裁にと、たちにとりかかるという若き良き時代を味あわしてくれたのあの山です。

海と山にめぐまれ、犬を連れての散歩、お弁当をもつて子供を連れてのハイキング等々、若い仕事時代の裏に、そのエネルギーと休息がそのままによつて与えられました。

東京と神戸を十五時間と十六時間もかかつて寝台列車、特急が出来て八時間半、遂に新幹線の超特急三時間十分、そして飛行機の四十五分と、五十年の旅の歴史も味わいました。

食物も、外人の多い神戸では、デリカテッセンのソーセージ、チーズ、ドンクのパン、そしておいしい中国料理、灘のお酒、新しいお魚、味覚の上でも日本一といつても良い程、味を楽しませてくれたところです。

日本中に数多くの街がありますが、神戸という所は全く日本に一つしかない国際的で、多様性をもつ不思議な街で、その中に独特の情緒をもつています。一時は飛行機時代全盛で港というものは影薄い気持ちでしたが、またかえつて本当の旅を楽しむ人は船を利用するようになり、神戸港の新しい生命が、また開かれることでしよう。一度、昔思ひもよらなかつた大きな豪華船で、静かに入港してみたい気持ちです。ジェットのスピードとは正反対の欲望もまた人間には不思議のあるものです。百年の歴史を土台にし現代に生きる港として、新しい発展をねがわすにはおられません。

神戸の詩人たち

伊藤信吉

原清の二人だが、私の手もとにはその雑誌もない。竹中郁には大阪で会ったことがあるが、福原清についてはなんの知識もない。その詩集も持っていない。

二月下旬のおだやかな夕暮れ。私は暮れてゆく神戸港の岸壁に立って、港に碇泊している汽船の灯をみていた。それらの汽船の現代の城——ビルを海に浮かべたようなものだ。その岸壁でライタの火をつけて「おや」とおもった。炎が青く透明にうつくしいのだ。微かな潮風をうけると、ライターの火は青く透明になるのだろうか。

どこの港でもそうだが、汽船の出入りはなんとなくエキゾチックな気持にさそう。まして船室のあるかるい灯は童話的だ。私は老人だから、あの汽船はどこへ行くのだろうなどと未知の世界を想像することはしないが、それでも港には「異国」めいたものがある。だが異国はさまざまだ。二万トンのイギリス観光船も異国だし、ベトナム行の貨物船だって異国だ。そういう国際的な入り混じりをおもわぬわけにはゆかないし、ベトナム号に目をむけても、「異国」的だと「童話」的だとかいう、そんな他愛ない情緒はけし飛んでしまう。私は神戸港を語ることはできない。

神戸の町ということから、私の思いに浮かんでくるのは昔の「海港詩人俱楽部」の詩人たちである。そのグループの雑誌『羅針B』である。同人は誰々だったろう。おぼえているのは竹中郁、福

悲しげに海鷗が啼く

灰いろの翼をひるがへして

荒い波にさからって
きびしい一つの意志が飛ぶ

みよみよ

飛沫に濡れる翼

なほも高き浪を超へて

遠く小さく

へんべんと

いかに軽く翔けるかよ。

これは福原清の「浪を超へて」の部分である。私はこの詩が好きだ。灰色の翼。その飛翔に寓意したものの重さにもかかわらず、浪のひるがえるような変転のリズムが私をひきつける。

詩集を持つていいのに、どうしてその作品を引例することができたかというと、これを私は福原清詩集『月の出』（大正十三年十月刊）に寄せた萩原朔太郎の序文から借りた。私は萩原朔太郎のその序文の写しを持っていいるのだ。この詩人について萩原朔太郎は「仏蘭西風の象徴詩にみるところの、あの黄色い花粉のやうなデリケシイと、すてきな、さういった情操を、この詩集の著者に於て見えてさう出来る」とっている。福原清はこういふ作風の詩人といってよいだろうが、ここにみた

「浪を超へて」については「果然、ここには觀念詩派への傾流が現われてきた」といつている。

こんなふうに私には、萩原朔太郎の序文を通してしか言うことができないが、この詩のテーマは

作者が神戸に住んでいたことによって可能だった

のである。大正十三年（一九二四）といえばずいぶん遠いことだ。そのころの神戸港はもつと小さかったろう。その港の空にひるがえる鷗の姿に、作者は自分の「一つの意志」を寓意したのである。

神戸にかかわりのあるもう一人の詩人は八木重吉である。この詩人は東京の豊多摩に生まれ、詩人たちとの往来もなかつたため、神戸に住んでいたことさえほとんど知られていない。基督者だったこの詩人はひつそりと二十九年の生涯を過したが、大正十年から同十四年（一九二一～二五）にいたる満四カ年の神戸暮しの日々も、やはりひつそりとした生活だったのだろう。

冬のはじめ
屋上庭園のうへからみる
神戸の街の
妙によそよそしい
そのくせひとすぢのたちがたいあくがれの
にじんだ顔
山のはうだけは
秋ばれのやうにすみきつてあかるい
たかいところからみるゆゑだらうか
まやまやとたちのぼるむすうけむりのいた
ましさ
いちやうに

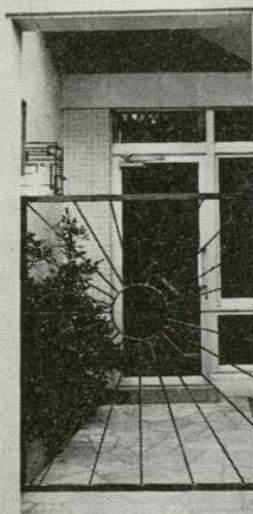
くすんだはがねいろの街のいろいろ
ざつ然としたそのすがたは
整然としたひとすぢの悲しみとなつてつんざいてくる

ここに四十余年前の神戸の風景があるが、この詩も八木重吉の性格をうつしてひつそりとしている。立ちのぼる工場の煤煙を「まやまや」と形容してあるが、これはたぶん「濛々」のことだろう。

「まやまや」という形容は語感がおだやかで、詩ぜんたいがひつそりとしている。冬の日の冷たさに触れるような悲しみさえひそめた詩である。その四年間を八木重吉は御影中学校の教職にあつた。住居が何町だったかを私は知らない。いかにひつそりとした人格でも、神戸住まいのあいだに、八木重吉は当時の繁華街元町のあたりを散策したろう。この詩にいう「屋上庭園」もデパートのそれであつたろう。

神戸の街の発展の規模からすれば、八木重吉のこの詩はほんの小さな断片にしか過ぎない。しかし四十数年前の神戸を描いた詩は、八木重吉のこの一篇だけではないだろうか。いまの人口百三十万近い町にくらべて、その当時の神戸はずつと小さかったろう。そのことはこの詩からもうかがわれる。三宮の繁華街は現代都市の象徴といつてよいが、八木重吉が住んでいたころは、地下街など想像もできなかつたろう。私は六甲の中腹あたりで、燈火の見事な夜の市街を眺めながら、過ぎた日の詩人たちのことをおもつていた。詩人の運命も燈火に似て、私どもの記憶の中に明滅するかのようだ……。

△詩人△



BAR ★ KOBE IKUTASUJI (33) 0886

Moon Light

CLUB ★ KOBE IKUTASUJI (33) 0157

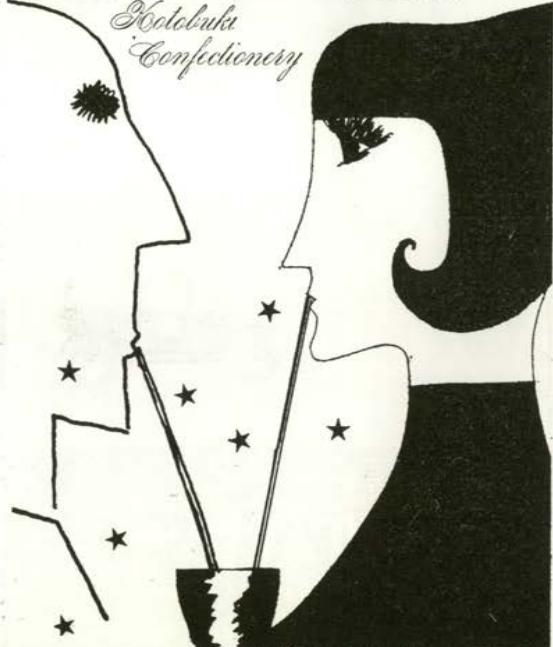
三宮店・阪急神戸駅西口前
TEL 神戸 (078)-33-0381

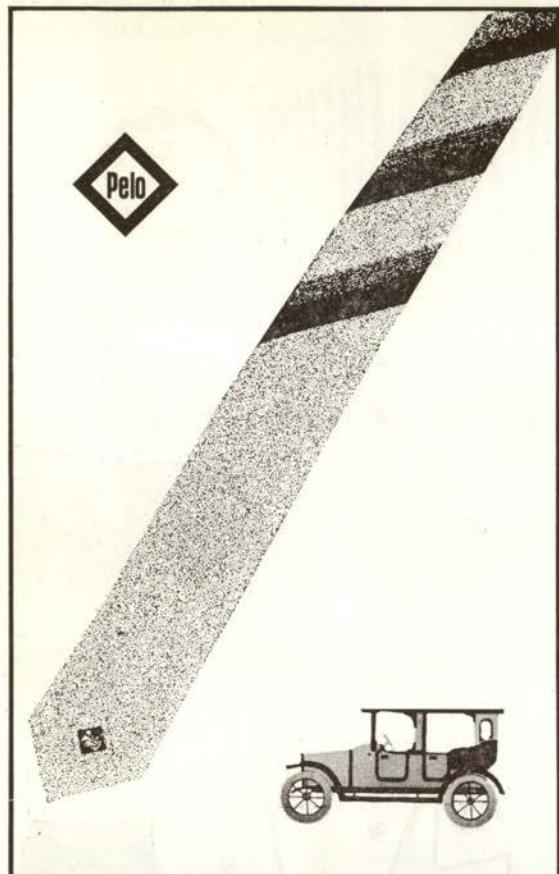


お菓子の
コトブキ

壽本舗

*Kotofuki
Confectionery*



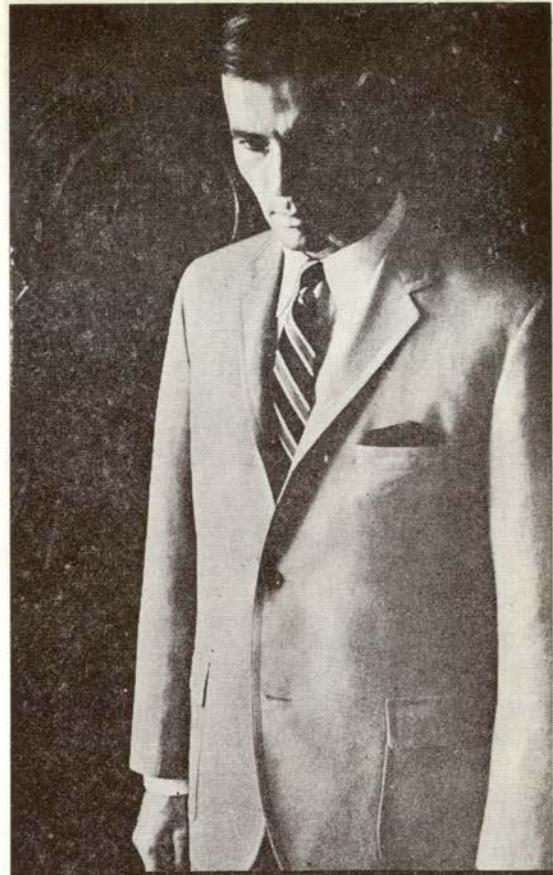


日本販売元

元町バザー

神戸・元町1丁目 TEL (33) 1401 - 7031

東京・日本橋・白木屋



O-SHIBATA

柴田音吉洋服店



神戸・元町通4丁目 神戸 34 0693
大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106



□宮地裏二氏

★神戸つ子対談

無限の可能性を秘める神戸

宮地裏二

（宮地汽船社長・神戸経済同友会代表幹事）

角南猛夫

（角南商事KK社長）

神戸港開港百年を記念して、今月の神戸つ子対談は、神戸財界の新しい時代をつくる人たちである、宮地裏二氏と角南猛夫氏をむかえて開港百年をどう受けとめるかということ、経済同友会の問題などについてお話し合いいただいた。

★開港百年はコンテナ時代の転機

角南

私はもともと田姓ですね。△タレント田英夫氏とはいとこになる△学習院大学在学中はトランペットを

やってまして、当時は南里文雄、田裏二と、トランペ

ットの三傑といわれましたね。その後、昭和二十一年にこちらにきまして、宮地の養子になつたんですが、ちょうど終戦の翌年でね、神戸に着いたのが三月三十日なんですね。その夜、風邪をひいて寝て五人組の強盗に入られた（笑）。これがぼくの神戸つ子第一日目ですワ。手足を縛られてしまつてねえ（爆笑）。

宮地 私はもともと田姓ですね。△タレント田英夫氏とはいとこになる△学習院大学在学中はトランペットをやつてまして、当時は南里文雄、田裏二と、トランペ

ットの三傑といわれましたね。その後、昭和二十一年に治維新をむかえて、俗にいう士族の商法をはじめて失敗しているんです。現在の仕事は父が初めましてね、私で二代目です。もとは兵庫で商売をやってたんです。昔の

神戸の中心は兵庫の方でしたが、最近は経済の中心が東

の方へ移りましたねえ。ショッピングでも元町よりセンター街の方が人出が多くなったようですね。戦前は「元 ブラ」といいまして元町が多かったんですが……。あの 街並は昔の東海道そのままの道筋らしいですね。百年前

は松並木に海が見え、二ツ茶屋と称するお茶屋があつた そうです。神戸はもともと輪田の泊として栄えた港です から、今さら百年はおかしいぢやないか、という説もあ るんですよ。もつとも、近代的な港として出発したのは 井伊直弼の開港以来ですけれどもね。

そして、第一次世界大戦当時に非常な船ブームがきて 神戸が殷賑をきわめた。それが戦後、東京に中心が移つ て戦争を境にしてコロッコと地図が変わってしまった。

宮地 それは企業として神戸を見た場合の話で、港の実 力はやっぱり変わりはないと思いますね。おそらく、輸 出は日本第一でしようしねえ。

角南 今度はコンテナ基地ができますね。これはやはり 私らのような門外漢からみましても、ひとつ輸出の大 革命という気がするんです。そうしてみると、神戸が流 通のセンターのような格好になつてくる。それには道路 が発達しなければならないですね。開港百年というこ の好機に、コンテナ時代という転機をむかえて、神戸は やはり港を中心にして繁栄しなければならないと感じま すねえ。

宮地 そうですよ。神戸港は天然の良港ですからね。山 が近く、海は深い。かといって、あまりに深すぎるという こともないですからね。いい港です。大阪港がいくら頑張 つても港の資質という面では無理ですよ。これだけはい くら土木作業が発達しても人工ではできませんからね。
角南 だから明石架橋ができ、裏六甲が開発されて神戸 の入口が広くなると神戸は海上輸送のセンターでもあり 陸上輸送の要にもなる。隣接した道路網に接続して、陸 揚げしたものが大阪方面へゆくとか、できあがった製品 をコンテナに積みこんで外国へ輸出する。そういう輸送

の大型化の時代に入るんじゃないですかね。

宮地 たしかにコンテナはひとつ輸送革命です。それがちょうど開港百年にぶつかったというのは面白いと思 うなあ。そういう意味で原口市長のアイデアは面白い。たとえば、ポート・アイランドの考え方方にして市長は 「港というものはいくら金をかけてもできるものではな いし天然自然の問題もある。その整備には大変に金がかかる。どこもかしこも作らんで、神戸港を集め散地とし 外航と内航の接続点として活用すべきだ」というんです。これは神戸の人間だからいんじやなしに、日本全体の 経済から考えて、実にいい想だと思いますね。

とにかく、今は荷役のスピードが進んでいて、そのスピーディー・アップというものは大きな問題になつていてる。

角南 前にロータリーの会合でコンテナの映画を見たんですけど、あの速さで荷役すれば係船代も何分の1かのコストで済むでしよう。

宮地 現在はコストが少々高くついても、長い目でみればプラスになりますね。ただ、陸上輸送が大変でしょ 大体20トンくらいあるでしょう。普通の道路では角が曲 れないだろうね。

角南 道路問題ですね。今の状態では無理ではないですかねえ。

★神戸経済同友会の方向を考える

角南 今年で昭和も四十二年でJC(青年会議所)の方 もとうとう大正生れのものがいなくなりまして、宮地さんなどの昭和生れの人たちが神戸の発展のために思い切 つて発言をしていただきたいと思うんです。そういう意味からいっても、今度、宮地さんが経済同友会の代表幹事に再任されたのはわれわれとしても嬉しいんです。が、同友会というのは敗戦のショックの中から、若い経営者が大御所に物申す団体として生れた。と、聞いているんですが、その頃に若かった方々が既に六十をこえられて、各種の経済団体の役員を兼務されています。そうします

と、本来の同友会の趣旨が見失われて、一種の社交団体的な要素が強くなっている、と思うんです。

宮地 しかし、弁護するわけではないけれど同友会に出てこられる方は、年配の方でもいわることは若いですよ。だから、逆に年配の人があまり年を召されぬよう、同友会を若返りのための場として大いに利用していただいたら良いと思いますよ。

同友会というのは、"同憂会"という精神からきているんです。だから実行する団体ではない。しかし、ぼくは精神論は結構なけれど、現在では何か理論ばかり先走っているように思うんです。もっと一般の人が聞いても分るような具体的な問題を提起すべきではないか、という感じをもっているんです。例えば、ポート・オーソリティの問題にしてもあれは新聞の社会面に載ったんです。社会面にのることは、皆さんが読まれるということです。それが、われわれの本当にいいことは、

港の管理と経営はどうするか、ということだった。

ところが、防波堤ができると埠までゆけるようになるということがつけ足してあった。すると、うちの運転手などが、"よその運転手がひどく喜こんでいました

よ。これからは埠までゆくのもいき易くなる……ってねどうか頑張ってください。"(笑)と、すり變つてしまふんです。もともと、ポート・オーソリティということ自体は広く皆さんに知っていた。大きめにねえ。

だから、同じことをいうのでも皆さんが読まれるような記事になるように問題を提起するのも必要ではないかと思いますね。ただ、同友会の性質として、ひとつ個人的な集まりですからね。あまり具体的な問題を出すと尻切れトンボになつて無責任になるという心配はありますね。ポート・オーソリティの構想にしても、ずいぶん叱られましたよ。"なんだ、お前、尻切れトンボじゃないか"ってね。(笑)ひとつ段階があるんです。それをどこかで引き継ぎすれば良いんですがね。それが多いことですしね。

角南 そういう意味では経済四団体がお互いに横の連絡を緊密にとつていただきたいですね。共通のメンバーの方が多いことですしね。

宮地 それは、こんど神戸でJ.C.を加えた四団体が話し合いの場をもつようになつたでしょう。あれは具体的な問題をとりあげますでしょ、だから良いですね。

角南 われわれには同友会で勉強させてもら、という



□角南猛夫氏

気持が強いでしたからね。基幹産業のトップマネージメントの方々にいろいろと教えをいただく場として、また年が若いということは経験の面でも、未だしの念がありますから、後輩の指導という意味をかねて大いに若い者の場にも出ていただきたいですね。どうも神戸に居る企業がやはり、神戸の経済界にもう少し力を入れて、中央に対しても力のある人が同友会でも発言し、もっともつと活躍して欲しいということが望ましいですね。

宮地 今までは一般的にいって、神戸に本社をおくる企業の方々と同友会との縁が薄かったという気はします。やはり、むつかしい話ばかりではなくに、ときには酒を飲んで馬鹿話をしても、何かあったときには話ができるという下地は作っておくべきですね。年令差があればあるほど、そういう縦の縁が必要ですからね。神戸はそういう所が欠けていましたね。

★ちょうど頃合いの港都

角南 私は仕事の関係から川崎製鉄、重工などを初めとする神戸の企業の、重要な役割というものを感じているんですがね。

私の少年時代は軍艦建造時代で、軍艦、航空母艦などをすいぶん造っていました。そういう時代に育つて、終戦をむかえ、戦後の計画造船時代というものになつた。そして、現在は戦争には関係のない時代です。まあ、敵密には防衛府の小型潜水艦、駆逐艦などはありますけれどね。それで、"港と神戸"ということもさることながら、造船と神戸"、"鉄鋼と神戸"という面からみましても、百年の間に技術革新は進んだし、百年は大節という気持が強いですね。これを区切りにして、神戸の企業がその地方で大きく発展して欲しいという期待はありますね。

宮地 船の場合は、今まで長い間に大きな変化はないんですね。ですから中古船を買っても、結構、やっていくところというものが船なんですね。それが最近では急に、船の方も変わってきたね。他の産業なみになってしまった。

全般に大型化、能率化ということがいわれ、乗組員の数も減ってきましたね。むかしの軍艦の造船技術は大変に高度なものだったらしくて、現在、日本の造船が世界に冠たるもの、軍艦建造を母体とした造船技術が支えになつていると思うんですよ。

角南 とくに溶接技術では世界最高のものをもつてているというのは素晴らしいことですねえ。戦争というのは大きな罪悪ではあつたけれども、ある面からみれば技術革新に役立った。ということはいえますね。

宮地 これは、根本問題だと思うんですがね。一時、神戸は斜陽の都市だとか、神戸に財界ありや否やとかいわれましたが、私は決してそうは思いません。

それは、それぞれの経済の大きさというものはありません。でも、東京、大阪に較べて神戸が数字的に小さいから

といつて卑下することはありませんし、妙な競争心を出さなくても良いと思う。神戸には神戸の良いところがあるんですから、それを伸ばしてゆけばよいと思いますよ

また、逆に自信過剰になつて、ほかの都市との協調を乱しても伸びないしね。やりようによつては非常に面白い大きさの都会ですよ、神戸は。

角南 気候はよし、食べ物も美味しい住みよい都市でもありますし、港を中心とした神戸の企業が大きく発展していくから、裏六甲の開発、架橋で四国、中国と直結するということになりますと面白いですし、まだまだ発展する余地は充分にあると思います。

宮地 やはり神戸っ子は個人個人があんまり恵まれすぎているから、全体にお坊ちゃんですよ。交際は上手だけど、大阪の商人の根性と名古屋人のバイタリティというものが感じられない。スマートすぎますよ。

角南 そういう面で、他所へ出て神戸を客観的にみて、恵まれた環境におぼれないよう、大いに神戸を中心にして活躍して欲しいですね。各自の企業が発展するということは、神戸が発展するということですからね。

経済ポケット

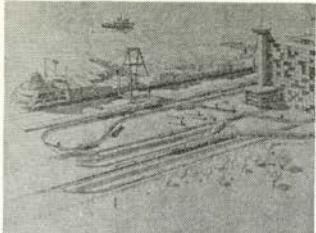
ジャーナル



★売り込みねらう

立体コンテナヤード

「錢湯の脱衣箱のような『立体コンテナヤード』が川崎重工、川崎汽船の間で検討されている。立体コンテナヤードは米国カイザー社のアイデア。鋼鉄のたなをビルのように組み立て、この空間にコンテナを入れ移



立体コンテナ基地

動エレベーターで上げおろしするもので、狭い用地しかない日本にはもつてこないカラになつたコンテナをいいとの考え方が出てきた。

神戸市は労働省、雇用促進事業団の協力で新年度から摩耶ふ頭の基部約九千平方メートルに四階建ての港湾労働者福祉センター、港湾労働

者訓練学校を建設するのをはじめ、港湾職業安定所も業績向上も望めず二月から労基局分室も集めた港湾総合センターづくりに着手することになった。

訓練学校は姉妹港提携を結ぶロッテルダムのそれが理想。三千三百平方㍍に教室と荷役機械を備えた実習場のはか、広い海上を利するものがミン。同ふ頭基

室東岸壁に係留されている「進徳丸」(元神戸商船大日本船渠)が移転保存されることになったので、この跡へ中古船か本船のハッチ

ひとつを浮かべて本番さながらの荷役実習をしようといふもの。訓練学校では当初、かなりの赤字を覚悟してなにわ丸を就航させ、日韓国交正常化の人々の盛んな渡航、賠償債務の輸送などに大きな期待をかけた。だが韓国のドル不足、海外渡航制限など、お

が赤字のため休航している。同社の韓国定期航路は三十八年十一月から大韓運公社(韓国国策会社)九州郵船と並び毎週二便でスタート、これまでの航海でたまたま赤字は一航海につき百万円、合わせて約一十五ドル、同B三十ドル、一二等二十ドルで行ける飛行機を利用する時勢。「なにわ丸」の休航は長引きそうだ。

●建設費は十五段積みで五

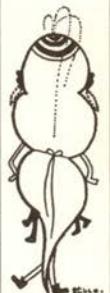
十億円かかる

採用され

る公算もある。

建設費は十五段積みで五

☆神戸の集いから



★小山牧子“作家賞”受賞記念の集い

本誌に異人館物語を連載中の小山

牧子さんが、名古屋の小谷剛氏主宰の「作家賞」を受けたことはお知らせした。受賞を記念して小山さんの所属する“自我”的同人、友人が集まつてささやかな小山牧子を励ます会を開いた。

神戸新聞文芸部の伊藤誠氏の司会で初まつたこの会は新人小山さんを解剖し、叱り、励ます言葉がのべられ、まだ独身の小山さんにこれを機



★意気さかんに行われた

一九六七日米合同アラスカ登山隊 歓送会

県政百年、開港百年を記念しておこなわれる“一九六七日米合同アラ

スカ登山隊”観送会が、去る二月一

十七日オリエンタルホテル桜の間で

おこなわれた。この登山隊はアラス

カの未踏峰（四、四〇二メートル）の登頂

を目指すもので、日本側が兵庫県山

岳連盟、神戸新聞社主催、県と市は

か八団体が後援、アメリカワシントン州シーアトル市の山岳団体“ザ・マ

ウンテンニアーズ”と合同で姉妹県市親善登山をねらった。会場では主催

者を代表して山本吉之助氏（兵庫県

山岳連盟副会長）が協力を感謝して

あいさつ。くれぐれも隊員の健康留意を望んだ。そのあと田中寛次（神戸

新聞社長があいさつ。引き続き宮崎辰雄（神戸市助役）、津田周二

隊長（兵庫県山岳連盟会長）以下十

人に会にムコさがしをしようということになつた。

小山さんは「もらった賞が同人誌の賞であるということがとても嬉しい。これからも地方で文字を地道にやりたい。それから今年は結婚もして……」と恥かしそうだがきっぱりと語つた。

会には田村美智子さんが振袖姿も美しく、花束を贈呈し、初登頂の成功を祈つて乾杯したあと、和氣あいあいなバ

ーティの雰囲気を楽しんだ。

この日、会場にはアメリカ領事、副領事をはじめとして大西雄一（神戸市商工局長）、勝山義雄（アラスカ州政府事務所長代理）、岡部誠一（そこう神戸店長）、尾崎宏（日本山岳協会副会长）氏などが姿を見せていた。





33

品質のよい皮
あきのこないデザイン
きたえた技術がさえる
ヨシオカの靴



★靴のオーダーメード

ヨシオカ

神戸大丸前・33-5190
33-9763



春のチャンバー

スエター
コットン・パンツ

スニーカー

それに
チャンバー

これで

キミの

春のお洒落が

始まりました。

色・ベージュ・赤・
ブルー・オーラー・黄

¥ 2,900—¥ 3,200

若人の服飾〈マック〉

 **MAC**

★三宮本店／神戸センター街 ☎ 0895 ★トアロード店／セ
ンター街西口 ☎ 0896 ★新開地店／新開地本通り ☎ 06 7688
★姫路店★京都店



あなたの魅力を

一そうひきたたせる

おしゃれなSun glasses

★ドイツ・アメリカ・イタリアのトップモード
が揃いました。

★最新型(ドイツ製)加工機械によるスピード
アップと強度な近視のめだたないすり方が
できます。

服部メガネ店

大丸前 TEL (33) 1123

●パイオニア神戸

4



川崎正蔵

小川 誠

島→大阪を海路でしばしば往復したが、好んで洋型船を選び乗船するのが常であった。当時、木造の大きな和船が多かったが少數ながら洋型船は船腹が広く、船脚は早く、しかも安定性があるので、彼はわが国にも近い将来、必ず洋型船の時代が訪れると確信をもつようになり、必ず洋型船への関心は次第に深くなつていった。

正蔵は生涯のうちで三度死に直面している。慶応二年（一八六六）の山口県上ノ関の剣難、明治二年（一八六九）の土佐沖の海難、同五年の天草灘の海難がそれである。特に明治二年九月、鹿児島への船旅のときには、土佐沖で疾風・激浪に八時間余も翻弄され、船は沈没に瀕した。風浪がようやく収ったのちも、浸水したままの船は、月明りの海を急潮にのって南に漂流すること三十数時間。幸いにも種子島付近で救助され、九死に一生を得た。正蔵はこれもひとえに洋型船の賜物であると考え、この生還こそ、「船作りをもって終生のわざとせよ」との神の啓示であると解した。

日本の造船業は最近十一年間その受注量、進水量において世界のトップに立ち、日本経済の大きな成長力の源になっている。神戸に育ち、神戸で造船業をはじめた川崎正蔵（川崎重工業の創始者）は日本の造船業のパイオニアであり、造船の歴史はすべてここからはじまる。川崎正蔵は天保八年（一八三七）七月十日、桜島を望む鹿児島の城下町に生れた。天保年間といえれば、全国的に飢饉と疫病が相次ぎ、死者数十万と史書にしるされている。封建時代が激しく動搖し、それが新しい社会への原動力となろうとした天保の時代が正蔵の幼年期であった。

嘉永六年（一八五三）、十七才の正蔵は意を決して長崎に出た。時あたかも米国使節ペリーが浦賀に来航して世情は騒然としていた。正蔵はこれまで異人を相手に商談したことなどはなかつたし、まとまつた資本とてもなかつた。彼は「オランダ館」からわずかばかりの商品を仕入れ、それを神戸、大阪などに送つて商いをすることから出発した。正蔵は商いの関係で長崎→鹿児島、鹿児

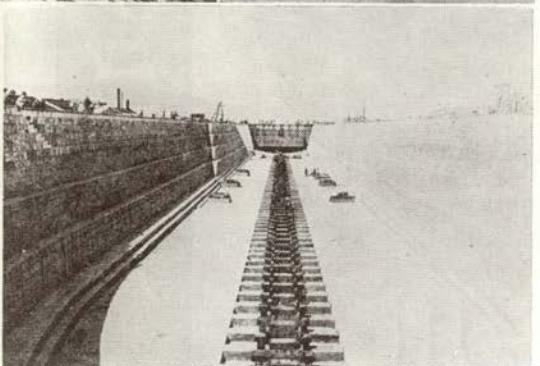
辛じて生命を全うするにおよんで、造船事業への意志は不動のものとなつた。開業までの準備に数年を見込んだのは、資金・用地などの調達が容易ならぬ問題であったからである。当時、和船の船大工は多かつたが、洋型船の造船技師は容易に得られなかつた。その方面的の有能な技師を得るために、彼は東奔西走した。

の必要を訴えた。また洋型船の安全・快速・有利を誠意をこめて説き、建造費の年払いや月払いによる造船契約を提案した。これが海運業者にうけて、洋型船の受注がだいに増してきた。

正蔵が東京築地に、政府所有地を貸与されたのは、「洋型船建造奨励」という国策にもよるものであった。第一船「北海丸」の竣工によつて、世に広く名を知られるに至つた正蔵には、兵庫にも造船を……との意欲が強く動いてきた。彼は熟慮を重ね、案を練り、東京と兵庫とで相手応じて船造りに挺身する決心をしたのである。

正蔵は商いを営んでいた間に、『造船創業』の意図はますます燃えていった。ひと筋に『造船ことはじめ』への用意をすすめていたが、未知の世界に挑む企てであるだけに、創業の体制を整えることは容易ではなかつた。ようやく機熟して、明治十一年（一八七八）四月、東京築地の官有地を借り受けて、川崎造船所を創業するまでにこぎつけた。小規模だが正蔵の長い夢はついに現実となつた。ここに至るまでの正蔵の努力は並々ではなかつたが、官有地の借用を許されたことは、後年かれを大成させた幸運の前ぶれであった。

造船所としての形態を一応整えて開業したものの、海運業者のうちには、洋型船の建造を歓迎しない向きが少なくなかった。そのおもな理由は船価高であり、また偏狭な国粹主義も影響していた。正藏は船主の集まる会合にしばしば出さしてもらつては国家的な立場から洋型船



上	明治24年当時の川崎造船所
中	明治35年に完成した第一ドック
下	明治19年当時に出された新聞広告

かった。しかし、東京と兵庫に、遠く離れて事業所を持ったために間もなく金融に行き詰まり、川崎兵庫造船所は欠損の連続であった。

経営の苦渋にあえいでいるとき、積荷を満載した正蔵の持ち船「竜王丸」「竜田丸」の二隻は暴風雨のため、前後して和歌山沖、および静岡県の沖合いで沈没した。持ち船二隻と積荷との喪失による莫大な損害は、正蔵に

明治十四年（一八八一）、兵庫県揖津国神戸区東出町（現在の神戸市兵庫区東出町）に川崎兵庫造船所を開設した。貿易の中心であり、出船・入船に賑う兵庫が、造船業に恰好の地であると考えた正藏の着眼は誤っていないかった。しかし、東京と兵庫に、遠く離れて事業所を持つために間もなく金融に行き詰まり、川崎兵庫造船所は欠損の連続であった。

かけていた。しかしそれらの夢も消え去り、事業では不死鳥であった正藏も、愛兒を相次いで失った大きな衝撃のため、ついに病床に臥してしまった。



布引山に閑寂なたずまいを見せる徳光院

とつて致命的な打撃であった。しかし、彼はこの傷手にも屈せず、受注船の工程を崩さぬように心をくばり、注文主との連絡などはおろそかにしなかった。

経営難がいよいよ深刻となっている時に三男が米国において死去。百日を出でずして次男を神戸で失った。正藏は家庭生活における彼の命ともいいうべき一人の愛児を殆んど同時に失った。また、事業でも造船業は、不振のどん底にあつた。事業の不振と家庭の不幸に悩み悶え、造船の業を続けることに光明を見失いかけた。倒産寸前という最悪の状態にまで追いつめられた。家庭の貧しさから、自分は十分に修学できなかつた正藏は、乳児のとき亡くなつた長男への愛情もこめて、三男新次郎を慶應義塾を経て米国に留学させていた。正藏夫妻は秀才な三男に親としての夢を託し、また勤勉な次男にも期待を

旧官営造船所の土地・家屋・施設の代価は、経営を続けて得る収益の中から五十年という長期間に年賦で払えばよかつた。これは「官営事業を民間へ移植させ、さらに育成させる」という明治政府の遠大な方針によるものであつた。その設備は、これまでの川崎兵庫造船所に幾倍するものであり、造船能力も大きかつた。

明治二十年「川崎造船所」と名付けたころ、全従業員は六百人を数え、事業の基礎は確立していたが、正藏は「商戦は最初の五年間」を常に説き、百トン程度のランチの受注交渉にも、自らこれに当つた。受注活動は常に積極的な態度で臨み、「ひと度び受注すれば、永久のお得意になつていただく」と、率先垂範、工事の指揮に当つた。彼は設計が完全でなければ、立派な製品は生まれないとして、着工に先立つ事前の用意は慎重かつ周密を期わめた。着工するや受注品の納期厳守を操業上の鉄則

として奮闘した。明治二十六年（一八九三）に一部の工場が焼失したとき、大阪市の天満橋、天神橋、筑前橋などの橋梁、東京市の水道鉄管、そのほか、紡績会社のボイラなどを製作中であった。正藏は鎮火後、火事場に全従業員を集めて、「火事を理由に同情にすがつて受注品の納期を遅らせてはお得意に相済まない。いまの場合こそ『納期厳守』を貫くときである」と訴え、契約期日に完納の見込みのつくまでの一十日間あまりは、自ら工場に寝泊りして仕事に取り組んだ。全従業員が一丸となり昼夜を分たぬ作業によって納期は一日も違えなかつた。納期厳守は作業上の「至上命令」であり、彼自らを律するモラルでもあつた。明治二十七年（一八九四）八月、日清戦争の突発によって、正藏は海軍の要請にもとづき、広島県宇品に臨時出張所を開設して、多くの軍船の修理、改造を行なつた。一方神戸工場では、この年十二月までに水雷敷設艇六隻を建造したほか、さらに幾隻かの貨客船を建造するなど、時代の火照りの中で業績はいよいよあがつた。

日清戦争のちの造船業界は異常の活況を呈し、海軍は巨艦船主は巨船を、それぞれ建造する傾向に進んだ。この情勢に応じるために、川崎造船所は施設を大巾に拡充することが必要であった。これは是非でもなさねばならぬ彼の焦眉の課題となつたが、そのためには巨額の資金を要した。かくて彼は經營組織を改変することを決意し、明治二十九年（一八九六）十月十五日、株式会社川崎造船所に改組し、社長には少壯三十才の松方幸次郎を迎えてこれに經營を託した。時に正藏は六十才であった。川崎正藏はこの日まで、いく度か死にも直面し、苦難をも乗り越え、きびしい風雪にもよく堪えてきた。六十才といえば、經營者として、いわば脂の乗りきつた、円熟した年令であった。正藏自身としては改組ののちも社長として經營の首座につき、株式会社川崎造船所をいよいよ成長させる意欲はあつた。しかし健康が昔のようではない。夫の身を案じて静養をする妻の切なる願

いを容れ、ついに第一線から退いたのである。

そして乾ドック（現在の川崎重工神戸工場第一乾ドック）構築という、困難な課題を松方社長に引き継いだ。乾ドック構築のため、少なからぬ費用をかけて数年来地質調査を行ない、資金の調達ができれば着工し得るまでの結論を得ていた。松方社長は就任後、ただちに乾ドック構築に着工。乾ドック構築が始まると、今も川崎家に家宝として伝わる不動明王の像に、敬けんな祈りをささげ、そのつがい姫工を念じ、工事を続けること三年。工事が暗礁に乗り上げたとき、正藏翁は苦惱している松方社長の弱氣を一笑に付し、「乾ドックの完成なくして、川崎の發展はない。社運を賭けてもやり遂げるように」と励ました。

第一線を退いてからは、年ごとに隆盛に向かう川崎造船を静かに眺めて、「日々是好日」の明け暮れであつた。晩年の最大の喜びは明治三十二年（一八九九）、當時東宮であられた大正天皇が神戸市布引の自邸をお訪ねになりました。また同四十四年（一九一一年）には当時皇后であられた昭憲皇后が静岡県興津の別宅にお訪ねになつて、親しく永年の労苦と貢献とをねぎられたことであつた。壮年のころから信仰の篤かつた翁は、晩年、「老来、鹿児島は遠く、しばしばの墓参りも叶わねば」といい、神戸市布引山に徳光院を建立して篤く先祖の靈を祀つた。川崎正藏は船造りのために生を享けたような人であった。そのためには生命を激しく燃焼させた。今日の全川崎は、九十年の昔蒔いた一粒の麦が、長い年月の試練を経て結実したものであるともいえよう。巡洋戦艦「榛名」の進水を翌年にひかえた大正元年（一九一二）の冬、病病体を川崎造船所を望見できる部屋へと移された。冬空をきってそびえているガントリー・クレーンと、巨艦の建造にフル操業を続いている川崎造船所を遥かに眺めながら、この年十一月二日、船造りのために生きた川崎正藏は七十六年の数奇な生涯を静かに閉じた。

晴れの日の
ウェディングケーキ



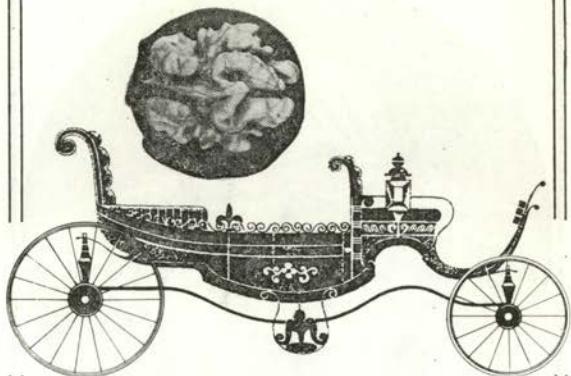
北欧の銘菓
**ユーハイム
コンフェクト**

本社・工場 / 神戸市内町1丁目 TEL 22-1164・9865
熊内店 / (市立美術館東隣)

三宮店 / 神戸三宮生田筋(階上喫茶室) TEL 33-7343・0156・4314

神戸デパート店 / 長田区大橋5丁目・甲子園店 / 国鉄甲子園口駅(北口)・芦屋店 / 国鉄芦屋駅前通・堂島営業所 / 大阪堂島中町ビル地階
梅田店 / 大阪梅田地下センター・栄町店 / 名古屋栄町ビル地階・千種工場 / 名古屋千種区若水町・大丸店 / 神戸・京都・阪急店 / 神戸
大阪・三越店 / 神戸・丸栄店 / 名古屋・オリエンタル中村 / 名古屋
大阪国際空港・神戸鉄道弘済会・丸物店 / 豊橋・松菴店 / 津・姫路
駅デパート・明石ステーションビル

粒よりの工芸品



この一粒に、すべてをか
けました。チョコの名門
<ゴンチャロフ>が、自
信をもっておとどけする
本格派の風味です――



チョコレート*キャンデー
ゴンチャロフ

神戸市生田区加納町4の1

春のあなたを創る
おしゃれな帽子！



マキシム帽子のおもとめは
全国有名百貨店でどうぞ

